愛護賞受賞にあたって

社会福祉法人蓬莱会　こどもデイサービスひまわり
山根　那美子

この度は愛護賞に選出していただき、誠にありがとうございます。なかなか正解というものを一言では表しにくいこの「障害児・者支援の世界」において日々試行錯誤している中、今回「愛護賞」というひとつの評価を頂けたことは大変光栄であり、これからの益々の励みにして参りたいと思っております。

私が大学を卒業後、最初に就職したのは幼稚園でした。しかしそこで障害の診断を受けた子、あるいはその傾向のある子と関わる中で「どんな子でも対応が出来る保育士にならなければいけない。そのためには実際の現場に入って学びたい。」とこの世界に足を踏み入れ、あれから早 10 年が経過いたしました。当時は「数年働いて少し知識を得たら保育、あるいは幼児教育の現場に戻ろう。」そんな気持ちでこの世界の扉を叩いた私でしたが、まもなく私はこの仕事の魅力にどんどん憑りつかれていきました。それは障がいを持つ子の純粋さに心を奪われたこともひとつの要因ではありますが、何よりも障がいを持つ方々のありのままを受け入れ、熱心に真正面から向き合う姿を見せてくださった上司の方々や先輩がこの仕事の魅力を教えてくださったおかげであると思っています。常に疑問を持ち、共に考え、実践し、失敗してはまた考え、時には見方を変え、そうした中で見つけ出した成功と成長を共に喜び合い、次の課題へ取り組んでいく…そんなことを繰り返しているうちに気付けば 10 年の月日が流れていました。

適切な支援を行うためには「相手を知ることが大切」だと言われていますが、それは障害を持つ人に限ったことではないと思っています。家族・子ども・友達・夫婦であっても「これを言ったら怒るだろう、こんなことをしたら喜んでくれるかな？」そういったことを考えながら日々関わっているのではないでしょうか。障害を持つ人に対して支援を行う場合もそれとなんら変わりは無いと私自身は考えています。ただ、私たちの事業所に通う人たちの多くは言葉を持っていませんし、持っていてもそれを機能的に使える人は限られています。そんな中で叩かれたり噛みついたりされたことも数知れませんが、それは相手が「違う！そうじゃない！」と言っている証拠です。相手が何を伝えようとしているのか、何に苦しんでいるのかを考え続け、それを理解出来た時には大きな喜びが待っています。今回の K 君においても例外ではありません。私たちは K 君の支援において現在も試行錯誤していますが、言葉を持たない分、行動に目を向け、相手が自ら行動を起こした時が彼の本音であると思っています。自分の気持ちを行動で表す、そんな純粋な人たちと向き合うことで私たちは日々関わりを反省し、相手を知ることを学ばせて頂いているのです。今回 K 君と向き合うことで、私たちは「私たちの思う幸せを押し付けてはならない」ということを学びました。「一般的な概念」というものが通用しないこの世界で、正解を見つけ出すことはとても難しいことではありますが、子どもたちが日々笑顔で過ごせることを大切にし、「この人に出会えて良かった」と思って戴けるような支援者を目指していきたいと思っています。

最後になりましたが、今回の研究集録の作成にあたりご理解、ご協力を頂いた K 君とそのご家族に感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。